

〔三七〕 次篇第三章參看。

〔三八〕 舊唐書突厥傳には「骨咄祿天授中病卒……其子尙幼、默啜遂篡其位、自爲可汗」と記し、新唐書突厥傳には、天授初、骨咄祿死、其子幼不得立、默啜自立爲可汗」と記せり、*Ongin* に存する突厥碑が果して *Radloff* 氏の考ふるが如く (*Altürkischen Inschriften d. Mong. S. 247*) 骨咄祿の爲に建てられたるものなりとすれば、該碑文には其の功を録せらるゝ人が龍の年に死せりと記さるゝを以て、正に六九一年即ち天授二年に骨咄祿が死したるものと見ざる可らず、然も此の碑が果して骨咄祿の爲に建てられたるものなりや否やは未定の問題に屬す、默啜の死も亦た龍の年にして開元四年(七一六年)即ち丙辰の年に殺されたるものなり。

〔三九〕 次篇補遺(一)、三九二—三九三頁參看。

〔四〇〕 新唐書回鶻傳にも回鶻の別部なるものを記せること次篇第三五九頁に引けるが如し。

〔四一〕 伏帝難の名は此等の兩書には載せず、之に就きては後に述ぶる所に譲る。

〔四二〕 第一七五頁參看。

〔四三〕 唐會要には「開元七年伏帝匐卒、贈特進、遣使弔祭、子承宗立」と記し、冊府元龜には開元七年「七月甲申河西經略副大使兼赤水軍使左金吾衛大將軍員外置同正員廻紇伏帝匐卒、贈特進、賜帛三百段、遣中使弔祭」と記せり。

〔四四〕 第三五九頁—三六〇頁。

〔四五〕 次篇第三五七頁參看。

〔四六〕 大武軍は唐書地理志に「代州雁門郡……其北有大同軍、本大武軍」と記さるれば、此の時來歸したる回鶻の別部は、他の鐵勒諸部と共に、先に甘涼地方に移り來りたるものとは別に置かれたるものなりとす。

〔四七〕 赤水軍は唐書地理志に「涼州有赤水軍、本赤烏鎮、有赤青泉、因名之、幅員五千一百八十里、軍之最大也」と見ゆ、唐會要には前に記せるが如く「故天寶末、取驍壯、以充赤水軍騎士」と記せど、かゝることは固とより天寶の末に至りて初めて生じたることとは思はれず、同書が其の續きに、伏帝匐が河西經略副使赤水軍使たりしことを記せるは、取りて以て其